

論文

ブドウ王、バロン・ナガサワとしての発展 —長沢鼎の結婚観と交友関係—

森 孝晴¹⁾

1) 891-0197 鹿児島市坂之上 8-34-1 鹿児島国際大学

1. ワイナリーの成長と長沢の結婚観

ファウンテン・ワイナリーは順調に大きくなり、そこに住む人々も増えていった。新生兄弟社メンバーだけでも20人ほどになっていて、その中にはトマス・レイク・ハリス、ダビーおばさんことジェーン・L・ウェリング (Miss)、レイ・クラークとその妻と二人の娘と義妹などが含まれていた。女性が多いのが特徴の一つだった。

さらに、ロバート・モリス・ハートと妻メアリーが1887年に加わったが、この男は長沢に対して最も敵対することになる。また、長沢に親切だったダビーおばさんことジェーン・L・ウェリングがやってきたのは1885年で、ハリス夫人が亡くなった直後のことだった。そして、ハリスはしばらくするとジェーンと再婚する。

農園には新井がいたが、日本人でありながら長沢との友情は育たなかった。新井はハリスの信仰を支える印刷担当だったし、一方長沢は忙しくて話をする暇もなかった。第一、ハリスの信仰のことばかり考えている新井と武士道精神を堅持しつつブドウの生育とワイン醸造に打ち込んでいる長沢が話す話題もあまりなかっただろう。

そんな長沢もとくに30歳を超えていた。武士道精神と科学者精神で出来上がっている長沢をアメリカ人の仲間が理解するのはやさしいことではなかっただろう。その上、新井も親友にはなれないとすれば信じあえる相手を得ることはなかなかできなかったし、ましてや結婚など考える余裕などどこにもなかったに違いない。そんな中で可能なことがあったとすれば、親族を鹿児島から呼び寄せることだったかもしれない。

後年長沢は、伊地知家の人々に、自分は忙しすぎて結婚する暇もなかったというようなことを言っている。これはまんざら偽りではないだろう。長沢の様々な行動や人生行路を考え併せてみれば、その通りだったのかもしれないと



図1 真ん中の男性がハリス。その二人右がジェーン・ウェリング。そのほか、クラークの妻、二人の娘、義妹が映っている。

思われるのである。

長沢はなぜ生涯結婚しなかったのか、と問われることは多いが、筆者はそのたびに、答えは単純ではないとまず答えることにしている。それは彼がなぜ完全に帰国することをしなかったのかという質問に対する答えと同じことである。では、長沢は結婚についてどう考え、どんな影響を受けていたのだろうか。

長沢は独身主義者だったのか？門田はファウンテングローブ時代の長沢について「結婚生活に入りたいという考えは、彼の心から完全に一掃されていたようである」と述べており、ハリスの影響にも触れている。「主義」というほどの信念があったとは思えないが、様々な理由があって気がつけば結婚しないままになってしまった、というのが正しいように感じる。

門田は筆者に、その一つの理由として、周りに多くの女性がいいたことを挙げていた。すでに述べたように教団には圧倒的に女性が多かったわけで、そのため女性に対する長沢の欲求とか志向性とかが希薄であったというのだ。ハリ



図2 くつろいでトランプをする長沢 (30歳代前半)

スの影響については、長沢は心からハリスを尊敬し敬愛して、彼に実父に対して持つ愛情にも似た感情を持っていた。しかしその一方で宗教的にはハリスにどっぷり浸るような気持ちにはなれなかったと思われ、その影響は道徳的なものにとどまった。

ハリスは、自身は二度も結婚しているわりに、信徒の男女関係に関する道徳には厳しく、特に結婚はそうやすやすとするものではないと説いていた。このことは、長沢の結婚観に強い影響を与えたと思われる。しかし、結婚を遠ざけた最大の原因はやはりまた彼の薩摩武士道精神であろう。この点には門田も言及しているが、筆者なりに説明してみたい。

まず第一に、長沢にとって、自分がアメリカ女性と結婚するなどということは想像もできないことだっただろう。では、日本女性とだったらよさそうなものだが、当時のカリフォルニアには彼に見合った日本女性がいる可能性は極めて低かったはずだ。さらに、門田も触れているように、鹿児島城下の厳しい郷中教育を受けた身としては長沢は女性と一緒に歩いたり、軽々に女性に関心を持ったりすることには強い抵抗があったに違いない。母国日本ではすでに明治に入っていて、少しずつだが男女の関係は変化しつつあったが、長沢の頭の中は依然として武士の生きている時代のままであったから、たとえ近くにお似合いの女性がいたとしても彼の方から近づいていくのは至難の業であり、女性からしても、いつも威厳をくずさず口を真一文字に結んでいるような真面目一方の長沢は近づきにくい存在だっただろう。

そんな長沢らしいエピソードが一つ二つ残っている。まずは、以前にも触れた山川捨松とのラブロマンスである。

これは全くの虚報だったのだが、長沢の友人の一人でもあった鷺津尺庵によれば、この件の真偽について長沢に尋ねた時に、彼はこれを強く否定し、その時の態度は、そういった浮いた話をすれば打ち掛かられんばかりの印象であったと言っている。

また、1897年に32年ぶりに第一回目の帰国を果たした時に、長沢に親族がこの機会に結婚することを強く勧めたそうだが、彼はこれを断り親族は二度とその話をしなかったという。結局長沢にはそういうことを考える余裕がなかったし、彼の頭の中にあったのは結局、帰国して薩摩藩のために働くことのできない自分がどうやって薩摩藩士として藩や母国に恥じない人間になり、一定の成果を上げるかということだったのでなかろうか。

2. 悲しい知らせと新たな人的交流

こうした発展の中で、訃報が前後して届いた。1881年の10月に母フミが他界したのだ。長沢はついに母親に再会することはなかった。また、1889年2月には、薩摩藩英国留学生の同志で兄とも慕っていた森有礼が暗殺されてしまったのだ。森は長沢とともにアメリカに渡り、なにくれとなく長沢のことを気にかけてくれた人物である。長沢にとって、初代文部大臣にまで上り詰めた森有礼との別れは早すぎた。長沢はこの時37歳であった。

長沢はルーサー・バーバンク以外のサンタローザ市民と付き合うことはほとんどなかった。市民から見ても彼はとっつきにくい人間だったろう。外出時には常にスーツを着て帽子をかぶり、常に姿勢正しく堂々と歩くような武士然とした長沢は、近づきがたい威厳を放っていただろう。また、彼は自顕流的な俊敏さを示すこともあったそうだから、周りのアメリカ人と比べると小柄であったものの、「怖い」とさえ思われていたかもしれない。しかし、そうして周りと距離を置き薩摩武士としての威厳を保っていなければアメリカ人社会の中で孤軍奮闘して生き抜くことはできなかったという事情もあったのではないか。

そんな中でも長沢は新たな知人を獲得していくことができた。それはワイナリーが順調に推移し多少余裕ができたことにもよるのだろうが、彼の関心は少しずつ外へ広がっていった。まず、長沢はサンフランシスコの日本領事館の領事珍田捨巳と親しくなり、アメリカに日本人移民をより多く受け入れようと考えようになった。これはファウンテングローブのすべての建物が完成した1890年ころのことだったが、さらにサンフランシスコに駐在していた日本



図3 左からバーバンク、長沢、マーカム



図4 真ん中がバーバンク、その右がロンドン

商社の社員とも交流し始めている。

長沢は珍田と協力していくつもの移民計画に関わった。長沢は1897年にもメキシコに日本人移民によって大農場を作ろうと計画したが、実現はしなかった。榎本武揚元外相が人口増加の解決策として海外移住を提唱しメキシコ南部に35人が入植したのがちょうどこの年で、今も現地には多くの子孫が暮らしているそうである。そういう流れに沿った、海外にいる自分も協力したいという長沢の計画であったのだろう。帰国しなかった者としてのせめてもの償いのようなものだったかもしれない。また、彼は、中国人やイタリア人の労働者に加えて、1892年ころから自分の農園に日本人の移民労働者を受け入れ始めた。これも同様の気持ちからだろう。

数少ない地元のアメリカ人の友人の中に二人の文学者がいたことは興味深い。そのうちの一人は詩人のエドウィン・マーカムである。有名な詩人のひとりであるマーカムは長沢と同年で、新生兄弟社がサンタローザに定住したすぐあと(1875年の後半)に、ハリスの教えに惹かれてメンバーとなりしばらく農園で過ごした後、バーバンクと並んで長沢の一生の親友となったのである。彼は生涯長沢を訪ね手紙を送った。

実はこのマーカムにはカリフォルニア州ソノマ郡のサンタローザに隣接する町にもう一人の親友がいた。それは当時の世界的ベストセラー作家でグレン・エレンに住んでいたジャック・ロンドン(1876-1916)であった。『野性の呼び声』(1903)や『白い牙』(1906)で知られるロンドンは、1904年6月に日露戦争の従軍取材から帰国した後にグレン・エレンに移り住み、ソノマ山に広大な土地を購入して定住した。ロンドンは科学的農業に強い関心を待ち、翌

1905年にはルーサー・バーバンクと知り合いになって様々なアドバイスを受け、1910年以降はバーバンクを訪ねて親しく交流している。マーカムもロンドン邸にしばしば滞在し、たびたび親しく手紙のやり取りなどを行っている。

つまり、長沢とマーカムは親友同士であり、マーカムとロンドンも親友である。また、長沢とバーバンクは極めて親しい仲であり、バーバンクはロンドンの先生であり親しい友人であった。したがってこの3人は親しい間柄であったと思われ、図3と図4の2枚の写真はそのことを物語っている。

ロンドンと長沢の関係については、以下の長沢の死亡記事(図5)が明確に報じているほか、サンタローザの歴史家もその関係を指摘している。また、後に長沢の農場にやってくることになる甥の共喜(姉モリの二男)の長男幸介の妻で、長沢とともに過ごし現在でも90歳を超えてご健在のエイミーさんの話によると、長沢のパーティーの参加者名簿に確かにロンドンの名があったということである。二人とも頻繁にパーティーを開いたことがわかっており、同じ有名人でお互い農業者同士でワインにも関わっているわけだから会っていないと考える方がおかしい。

ロンドンは日本の武士道に関心を持っており、すぐそばに侍の長沢がいたら、矢も楯もたまらず会いに行っただろうとさえ考えられるから、ロンドン側から見ても二人の交流の事実は、たとえ深いものではなくとも、間違いなからう。

3. シェバリエ事件と火事と再興

ファウンテングローブ・ワイナリーのすべての建物が完成した翌年に新生兄弟社を揺るがすような事件が起こっ

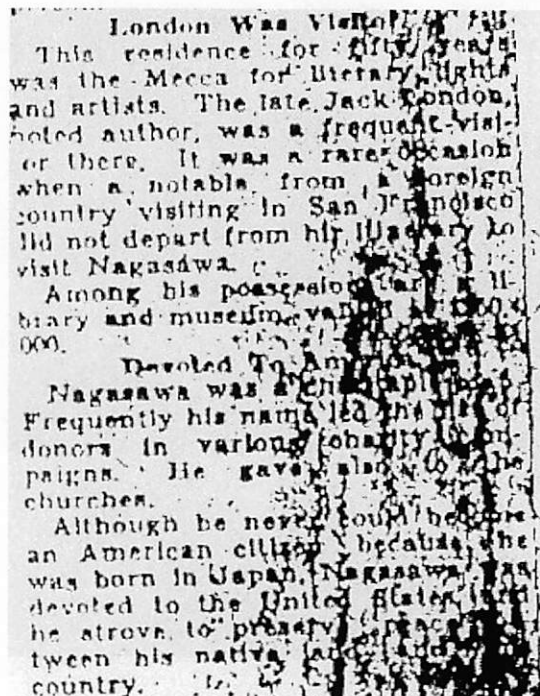
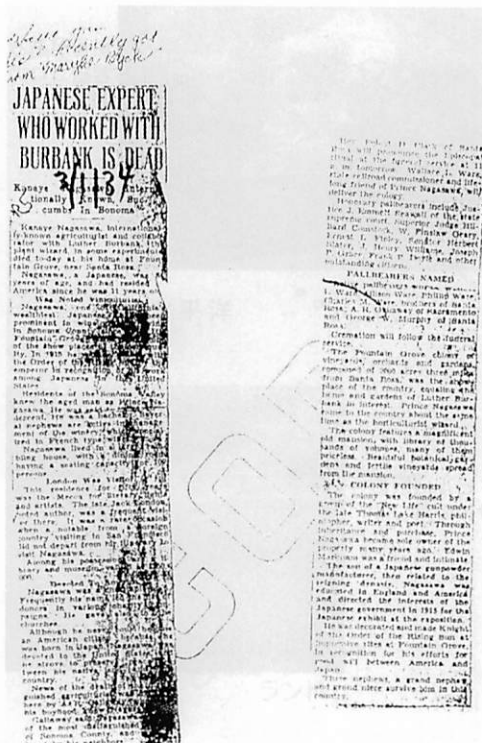


図5 1934年3月1日付の長沢の死亡記事(左)と、ロンドンとの交友に触れた部分を拡大したもの(右)



図6 40歳ころの長沢

た、神秘主義者のアルザイア・シェバリエという女性が1891年にハリスのもとを訪れた。はじめはハリスに気高さを見た彼女だったが、その後個性的な彼の教えの中にかがわしいものを感じ取って反発した。シェバリエはつい

に1892年の2月にサンフランシスコ・クロニクル紙上でハリスを攻撃した。クロニクル紙はこれまでも新生兄弟社を揶揄する記事を載せていたが、シェバリエの攻撃後はいっそう激しく兄弟社とハリスを非難する論評を連続して掲載した。

当然のことながら新生兄弟社のメンバーは苦悩し、ハリスの評判も傷つけられた。しかし彼女の激しい攻撃にもサントローザ市民は賛同しなかった。兄弟社の市民としての評価がすでに定着していたからだ。とはいうものの、ハリスは繊細な人間ですでに歳もとっていたので、この騒ぎに堪えられず1892年の2月に農場を去り、ニューヨーク市に転居したのである。

その結果長沢はファウンテングローブ・ワイナリーの土地と醸造所の管理を任された。彼は40歳になっていた。ワイナリーの運営はファウンテングローブ葡萄酒会社の名前でなされたが、彼は事実上の雇われ社長となったわけだ。父親のように慕い人生や倫理面での師であったハリスがいなくなったことは長沢には大きな痛手であった。その穴を埋めるものは精神的には薩摩の武士道精神だけであったと考えられる。

ハリスが農園を去ったこの1892年に、ワインの醸造所

が失火により火事になったが、半年後には再建された。ワイン製造もまもなく元の生産力を取り戻し、翌 1893 年には、ブドウの収穫が 1,500 トン、貯蔵されていて被害を免れたワインは 50 万ガロンに達した。1893 年にサンタローザから、91,130 ガロンのワインと 3,060 ガロンのブランディーが出荷されたが、この約 90 パーセントがファウンテングローブ・ワイナリーの製品であった。

文献

犬塚孝明 (1974, 1981). 『薩摩藩英国留学生』東京：中公新書.
犬塚孝明 (1986). 「翻刻 杉浦弘蔵ノート」『鹿児島県立短期大学地域研究所研究年報第 15 号』鹿児島：鹿児島県立短期大学.
犬塚孝明 (1987). 『明治維新対外関係史研究』東京：吉川弘文館.
犬塚孝明 (2007). 「1866 慶応二年 薩摩藩英国留学生」『世界を見た幕末維新の英傑たち 咸臨丸から岩倉使節団まで』東京：新人物往来社.

門田 明 (1991). 『若き薩摩の群像』鹿児島：高城書房.
門田 明, テリー・ジョーンズ (1983). 『カリフォルニアの士魂—薩摩留学生・長沢鼎小伝』東京：本邦書籍.
上坂 昇 (2017). 『カリフォルニアのワイン王 薩摩藩士・長沢鼎—宗教コロニーに一流ワイナリーを築いた男』東京：明石書店.
森 孝晴 (2014). 『ジャック・ロンドンと鹿児島』鹿児島：高城書房.
森 孝晴, 三木 靖 (2016). 『鹿児島歴史の旅—島津藩政と「薩摩藩英国留学生」—』(平成 27 年度特別講演会・かごしま県民大学中央センター連携講座解説冊子) 鹿児島：鹿児島県城西ロータリークラブ・鹿児島国際大学
長沢鼎常設展示室所蔵資料 (鹿児島国際大学内, 約 400 点)
志茂田景樹 (2008). 『蒼翼の獅子たち』東京：河出書房新社.
多胡吉郎 (2012). 『海を越え、地に熟し 長沢鼎 ブドウ王になったラスト・サムライ』東京：現代書館.
鷺津尺魔 (1933). 『長沢鼎翁伝』：鹿児島国際大学蔵
渡辺正清 (2013). 『評伝 長沢鼎 カリフォルニア・ワインに生きた薩摩の士』鹿児島：南日本開発センター.